成人期のAD/HD患者の主症状と機能障害を媒介する要因の検討
－行動的特徴に焦点を当てて－

金澤　潤一郎

＜目的＞

成人期のAD/HDに対して，AD/HD症状が機能障害に与える影響を媒介する認知行動的変数の治療に焦点を当てた認知行動療法が効果を示している．しかし，その治療機序に関しての認知行動モデル（Safren et al., 2004）は示されているものの，これまで実証的な検討がなされていない．特に重要な治療構成要素である補償方略（日常生活を支障なく過ごすために成人期のAD/HD患者が行う行動的対処法）について，どのような者が，どのような補償方略を用いることで機能障害を緩和させているのかは明らかでない．そこで本研究では，成人期のAD/HD症状と補償方略を測定する尺度の開発，および認知行動モデルの各変数（AD/HD症状，補償方略，気分状態）のタイプと機能障害との間の関連を検討した．本研究によって，成人期のAD/HD患者に対する認知行動療法モデルに基づいた治療についての基礎的な知見を提供できると考える．

＜方法＞

調査対象者　成人期のAD/HD患者が主宰する自助グループに参加するAD/HD患者54名．

調査材料　①フェイスシート：年齢，性別など基本属性　②成人期のAD/HD症状チェックリスト：DSM-IV-TR（2000）を基に本研究にて開発.「不注意」「多動性」「衝動性」の３因子14項目．③補償方略チェックリスト：予備調査で項目を収集し，本調査にて開発.「仕事・課題の管理」「環境調整」「サポート希求」の３因子16項目．④Sheehan Disability Scale日本語版（吉田他，2004）：機能障害の重篤度を測定．⑤日本語版Profile of Mood State短縮版（POMS：横山，2005）：気分状態を測定．

＜結果と考察＞

クラスター分析によって分類された補償方略のタイプ（サポート希求群，自己管理群，補償方略低使用群），AD/HD症状のタイプ（高AD/HD症状群，低AD/HD症状群），気分状態のタイプ（高POMS群，低POMS群）と機能障害との間にどのような関連があるのかを検討するために，分類された各タイプを独立変数，機能障害を従属変数とした分散分析を行った．その結果，AD/HD症状が重度で，周囲に理解を求め，協力や助力を得るという補償方略を多く用いている者が機能障害を緩和させている可能性が示された．また，自己管理タイプの補償方略を行っている者は，補償方略を行っているにも関わらず，補償方略低使用群と機能障害の程度が同程度であることが示された．さらに，補償方略のタイプよりも気分状態の重症度によって，機能障害の重症度が決定される可能性が示された．

本研究で得られた知見から，補償方略の習得のみではなく，認知療法や薬物療法による気分状態への介入も有用であることが示唆された．さらに，認知行動モデルでは示されていない気分状態から機能障害へのパスを引いた認知行動モデルの検討が必要であることが指摘された．

＜主要な文献＞

Safren, S. A., Sprich, S., Chulvick, S., & Otto, M. W. (2004). Psychosocial treatments for adults with attention-deficit/hyperactivity disorder. *Psychiatric Clinics of North America*, 27, 349–360.